

安部公房『第四間氷期』論—「記憶」と「満洲」をめぐる—

The Memory and Manchuria in Abe Kōbō's novel *Inter Ice Age 4*

解放

Abe Kōbō (1924-1993) is one of the representative Second Generation of Postwar Writers of Japan. His *The Woman in the Dunes* has been recognized worldwide. Abe was born in 1924; he spent his adolescence in Manchuria and returned to Japan in October 1946. At present, Abe is widely known as an avant-garde writer based on his series of "Tales of Transformation," which were published in the 1950s.

This study focuses on the analysis of Abe's representative avant-garde novel/ science fiction novel *Inter Ice Age 4*, which serialized from 1958 to 1959. The future-predicting computer in the work reflects Abe's opinions on the Cold War and his concern for the Japanese Communist Party at the same time. In addition, rather than predicting the future, the computer reconstructs the memories of the past, and the memory that the computer reproduces reflects Abe's experience in colonized Manchuria.

The water-oxygenating humans' child in *Inter Ice Age 4* is similar to corpses that Abe Kōbō saw in Manchuria. The seabed where water-oxygenating humans live is also called an artificial colony and is similar to the formation process of Manchukuo. Thus, the image of water-oxygenating humans depicted in *Inter Ice Age 4* comes from Abe's experience in colonized Manchuria.

This study aims to clarify the relationship between the surreal settings such as a future-predicting computer or water-oxygenating humans in *Inter Ice Age 4* and Abe's memory and explores the suggestiveness of Abe Kōbō's experience in colonized Manchuria that is hidden in the text.

87

【キーワード】 安部公房、『第四間氷期』、記憶、満洲、歴史

Abe Kōbō, *Inter Ice Age 4*, Memory, Manchuria, History

はじめに

安部公房(1924-1993)は生誕後まもなく、日本の植民地である満洲に渡り、終戦までの長い期間を満洲で暮らしてきた。1948年に東京帝国大学の医学部を卒業したものの、彼は医学関係の道を放棄して、文学を志したのである。

現在、安部公房は前衛文学の担い手として認識されている。ただし、安部はその文学創作の当初から前衛的だったのではない。むしろ、彼はリルケの影響で、実存主義を作品において追求してきたのだ。例えば『終りし道の標べに』(1948年)や『名もなき夜のために』(1948年)などの小説が代表的である。また、安部の40年代の作品群を一覧すると、『牧草』(1948年)や『鴉沼』(1948年)などのような、リアリズム小説も多く出版していることがわかる。このような一連の作品を経た後に、安部は「変形」や「変身」といったテーマを作品で扱いはじめ、その作風が初めて前衛に転換したのである。

安部公房の作風が前衛的なものに転換していく過程において、長編小説『第四間氷期』は特筆すべき作品だと言える。なぜならば、本作は安部が初めて書いた「SF小説」であり、評論家の奥野健男が「日

本における最初の本格的長篇SFである¹と評しているほどの重要な作品であったからである。しかし、本作に関する研究は、『砂の女』や『他人の顔』に関する研究と比較すると明らかに少ない。

本論文では、安部公房のSF小説の代表作である『第四間氷期』を研究対象に、テキストに描かれている「予言機械」と「水棲人間」といった科学的・未来的な存在に焦点を当て、このような科学的・未来的な存在と、安部の過去の「記憶」との関連性を考察する。また、こうした検討を通して、『第四間氷期』のテキストに反映されている安部の植民地・満洲での実体験の意味合いを明らかにしたい。

1. SF小説としての『第四間氷期』

『第四間氷期』は、『世界』1958年7月号から59年3月号まで連載された安部公房の長編小説である。まず、本作の梗概を簡単に紹介する。

ソ連は「予言機械」の「モスクワ1号」と「モスクワ2号」を続けて開発し、天気や経済発展などを正確に予言した上で、「未来は共産主義の世の中」になるという最終予言を行なった。日本の技術研究所の勝見博士は、ソ連に触発されて日本版の「予言機械」である「KEIGI-1」を開発した。勝見博士は或る一般人の男性を予言対象にして予言しようとしたが、男は殺されてしまった。勝見は犯人を捜すために「予言機械」を利用して、男の生前の「記憶」を見ることに成功したが、犯人はわからないままであった。しかし、「予言機械」を利用して調査しているうちに、勝見の妻は、謎の組織に騙されて墮胎させられた。この組織とは「水棲人間」を養育する組織であった。後に、自分の子供が「水棲人間」として成長することを知った勝見は、胎児を殺そうとしたが、未来の勝見博士に阻止され、最終的には、現在の勝見博士は未来の勝見博士に雇われた殺し屋に殺されて、物語は終わる。

注目すべきは、本作が発表された時点では、「SF」というジャンルがまだ日本の文壇において確立されていなかった点である。奥野は『第四間氷期』が発表された時代の状況を次のように述べている。

この頃、日本ではまだSFというジャンルははっきり意識されていなかった。今日の観点から歴史的に遡れば、それ以前にもSF的作品をいくつも発見し、拾うことが可能であろう。しかしそれは飽くまでもSF的作品であり、作者がはっきりSFとして、意識して書いた作品ではない。²

引用にあるように、『第四間氷期』が発表された1950年代後半には、日本での「SF」の定義はまだ確立されておらず、作家も自身が創作している作品が「SF」とは認識せずに執筆していることが多い。「SF」とは「Science Fiction」の略称で、科学的な空想に基づくフィクションのことを指し示す。日本において、「SF」は科学小説や空想科学小説とも呼ばれている³。定義に示されている通り、「SF」で重要視されているのは「サイエンス」と「フィクション」の二つの側面である。

安部は『第四間氷期』の執筆以前の作品において、既に科学技術や未来といったテーマを彼の作品で言及している。例えば、食糧危機を乗り越えようとして、羊の腸を人間に移植することで「草食人間」を作り出した話を描いた『盲腸』(1955年)や、人間が80万年後にタイムスリップすることを描いた『鉛の卵』(1957年)などが代表的である。しかし、科学技術や未来を一つの作品で統括的に描いたのは、『第

¹ 奥野健男「解説 安部公房—その人と作品」『世界SF全集』第二十七巻、早川書房、1971年5月、p.483。

² 同上。

³ 石川喬司『SFの時代—日本SFの胎動と展望』奇想天外社、1977年11月、p.9。

『第四間氷期』が最初だと思われる。奥野健男の「日本における最初の本格的長篇 SF 小説」という評価も『第四間氷期』のこの特徴を指し示しているだろう。

当時の批評家が本作を「本格的」「SF 小説」と認識しているのは、おそらく『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」や「予言機械」など現実では考えられない設定が科学や空想に結びつくところから生じると考えられる。しかし、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」と「予言機械」には、科学的・空想的側面の他に、現実的な意味合いも含まれていると思われる。次節では、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」と「予言機械」の現実的な意味合いを考察する。

2. 「予言」と「記憶」

『第四間氷期』には未来を予言できる「予言機械」が描かれている。作品で名を挙げられている「予言機械」とは、ソ連開発の「モスクワ 1 号」、「モスクワ 2 号」、日本開発の「KEIGI-1」のことである。作品に登場する「予言機械」は、ソ連が「モスクワ 1 号」を最初に開発したことによって、世界的話題となる。日本もソ連の「モスクワ 1 号」に触発されて、自身の「予言機械」の開発を加速させるようになる。しかし、「KEIGI-1」という「予言機械」が完成すると同時に、ソ連は「モスクワ 1 号」から進化した「モスクワ 2 号」を開発した。

天気や経済を中心に予言してきた「モスクワ 1 号」と異なり、「モスクワ 2 号」は政治的事件を専ら予言してきたため、アメリカから批判を浴びた。アメリカの政治的圧力はソ連に向けられているのと同時に、日本にも向けられている。勝見が「友邦アメリカの、この強硬な態度が、私たちの仕事に影響をおよぼさぬはずがない」⁴と述べているように、日本の「予言機械」「KEIGI-1」は、アメリカの影響を受けているために、その予言は政治とは無関係なことに限定されるようになったのだ。こうした経緯で、日本の「予言機械」の開発者勝見と頼木は、政治とは無関係の「個人の未来」を予言することに決める。

しかし、彼らが無差別に選択したはずの予言対象である「男」が突然殺されることによって事態は急転し、勝見と頼木は結局特殊な「サンプル」を選択した結果となってしまう。最終的に、勝見と頼木は、自分たちに向けられた殺人容疑を晴らすため、「男」の死体で「予言機械」を初めて本格的に試すことを強いられる。言い換えれば、これによって、日本の「予言機械」「KEIGI-1」が初めて本格的に稼動するならば、その予言対象として選択したのは、未来に生きることのない、つまりは未来を予言する可能性すらない死体であった、ということである。

この日本の「予言機械」が、未来の出来事の予測ではなく、過去の記憶を再現していることに重心を置いている点は注目すべきである。例えば、日本の「予言機械」「KEIGI-1」が本格的に始動した際、機械に掛けられた対象の「男」は既に死んでいるため、機械が予言しているのは未来のことではなく、死体となった「男」の過去の記憶である。つまり、「男」の死体に接続された「予言機械」が読み込んでいるものは、彼の脳細胞と神経であり、この「予言機械」は土田進という実在した「男」を、方程式の形式で機械に再現させたものなのだ。しかし、再現には成功したと言っても、機械から得られたものとは、彼が殺される直前の場面と、殺害されるまでの供述であり、「男」の記憶と回想といった過去のものに限定される。そもそも、「男」は既に死んでいるため、それ以降の未来を予言することは不可能である。その上で、勝見と頼木が生きている「女」を「予言機械」に掛けたにもかかわらず、彼女の未来を予言することにも失敗した点に着目する。

⁴ 安部公房「第四間氷期」『安部公房全集 9』新潮社、1998 年 4 月、p.17。

「やはり、何かにおびえているのかな？」

「さあ……ただ自分の影におびえているだけかもしれないし、あるいは、真犯人をかばおうとしているのかもしれない。もちろん、実際に強迫をうけている場合だってありうるわけだ。」

[…]

「もちろん、話としてだけです。三週間以内だって、胎児だって、なにかの特殊な隠語かもしれませんし……まあ、とにかく、女を機械にかけてみましょう、それが先決です。」

[…]

「じっとしていたって、いずれ嫌疑の手はのびてきますよ。[…]面白いですよ、ああいう女の未来を占ってみるのも……」⁵(下線筆者、以下同様)

引用部は、勝見と頼木が生きている「女」を「予言機械」に掛ける直前の描写である。彼らは「女の未来を占ってみる」と語っているが、実際二人が知ろうとしている内容とは、「何かにおびえている」、「真犯人をかばおうとしている」や「強迫をうけている」といった既に過ぎ去った殺人事件の真相に、「女」が如何にして関わっているかなどのことである。つまり、この場面においても登場人物が「予言機械」を通して知り得るものとは、未来のものではなく、過去のものに限られていることが示唆されている。また、「女」は、神経細胞が読み取れなくなるほどのダメージを、自殺するために服用した薬によって与えられるため、結局二人が考えている「女」の「未来を占ってみる」という計画自体は失敗に終わるのである。

90

さらに、勝見博士が「予言機械」を利用して妻の中絶事件を調査しようとした時には、「妻を予言機械にかけて、その記憶をほり出してやることだ」⁶とされているように、勝見が「予言機械」を通して把握しようとしていることは、やはり妻の未来ではなく、彼女の「記憶」である。本来、予言とは、ソ連の「予言機械」が機能するように、天気予報や国家経済の見通しなどの未知の事象に関する予測である。しかし、日本の「予言機械」は、ソ連のものとは異なり、未来の予測に焦点をあてていてのではなく、記憶という過去に発生した出来事を再生産することに力点を置いているのだ。テキストに描かれている日本の「予言機械」の特徴からして、「KEIGI-1」は豆の成長の分析など、未来の予言はできるものの、その主な機能とは、過去の記憶の再現にある、ということが言えるだろう。こうした設定は、日本の「予言機械」の操作原理と深く関わっていると思われる。

やがて機械の装備は充分だと思われたので、あとはもっぱら訓練と教育に専念することにした。

[…]しかし機械は自分で出てまわることは出来ないから、われわれ人間が手足になって歩きまわり、データを集めてきてやらなければならない。

[…]

機械は、無限の消化力をもっている。食べさせてやると、適当に自分で消化して、すっかりどこかに貯えてしまうのだ。そのうちどこかの《系》が飽和してくると、飽和したところから、その合図があるはずだ。するとその部分は、もう自分でプログラムを設計する力をもっていることになる。⁷

⁵ 同上、pp.54-55。

⁶ 同上、p.113。

⁷ 同上、p.16。

引用に書かれているように、日本の「予言機械」は、過去にあった記憶、すなわちデータを分析し、収集されたデータをもとに、未来の可能性を予測する機械である。この原理は、勝見博士と頼木が「予言機械」を「さっそく棚から例のスクラップをおろし、ばらばらにして、機械に分かり易いように、整理する仕事にかかった。スクラップの中身を、予言機におぼえさせてやろうというわけだ」⁸と操作するところから見てもわかる。作品に描かれている「予言機械」の工作内容とは、過去の記憶を最大限に積み上げ、この過去の記憶を分析することによって、未来の可能性を映像化することである。「予言機械」の原理からわかるように、未来とは、未知のものではなく、過去の記憶を推測することによって、把握できるものとして呈示されている。『第四間氷期』では、未来よりも、過去の記憶が優先され、未来の出来事とは、過去の記憶によって導き出されたある種の結論なのだ。

このように『第四間氷期』における「予言機械」が、未来の予言に力点を置くのではなく、過去の記憶の再現に力を入れていることは留意しなければならない。「記憶」がこれほど強調されていることを考慮すれば、この「記憶」という言葉について、単にテキスト自体の研究では、その意味合いの全貌を知ることは不可能ではないかと思われるからだ。筆者は、「予言機械」における記憶の再現が、作家としての安部公房の過去の「記憶」と結び付く可能性について考察してみたい。まず、次の二つの引用に着目してみる。

ある一人の個人の未来を予測するというのも、頭で考えていたあいだは、いかにもすばらしい試みのように思われていたのだが、こうして実際にその実験材料になるかもしれない人間を目のあたり見てしまうと、本当にそれほど意味のあることかどうか、疑わしくなってしまうのだ。⁹

「そう、資格さ……医者だって、むやみと人体実験を許されているというわけじゃない。下手すると、君、こいつは生体解剖なみだよ。」¹⁰

上記の二つの引用は、勝見と頼木が「予言機械」に掛ける対象を探す場面での描写である。下線部に注目すると、二人は予言の対象を「実験材料」と称し、さらに、予言自体を「人体実験」や「生体解剖」と比喩的に語っている。勝見博士は「人体実験」や「生体解剖」といったグロテスクなイメージを孕む言葉で述べているが、実際の「予言機械」の稼働場面はまさにその言葉通り、すなわち、グロテスクに進行するのだ。例えば、殺された男性の死体を「予言機械」にかける場面は次のように描かれている。

屍体は、特殊なガスと一緒に大きなガラス箱に密閉され、分析員はこれを、マジック・ハンドで遠隔操作するわけだ。山本博士が、箱のそばに立って説明してくれた。[……] 箱の左側から放射線が出されており、右側の壁にはそれをうけた屍体の解剖学的地図が現れている。[……] 頭にかぶっている、毛髪がわりに銅線が束になって生えた金属製の厚い帽子は、切りとった頭蓋骨のかわりで、直接脳に接して計器の役割をはたすのだそうである。[……] いよいよ分析がはじまった。[……] マジック・ハンドが動きだした。同時に数本の針が、体の各部にささり、[……] それに応じて箱の中の屍体が、まるで生きているように自由な運動をしはじめるのだ。[……] つづいて内臓の分析があり、それ

⁸ 同上、pp.23-24。

⁹ 同上、pp.28。

¹⁰ 同上、pp.31-32。

がすむと、いよいよ脳波の分析にうつった。マジック・ハンドの針が増され、七、八本が顔面に集中する。耳や目などの、感覚器を刺戟するのだ。さらに耳にはレシーバーが、目には大型の双眼鏡のような器具が降りてきて、音や映像を送りこみはじめる。¹¹

「同時に数本の針が、体の各部にささり」や「屍体が、まるで生きているように自由な運動をしはじめる」といった描写は、「男」の死体を分析する時のグロテスクな雰囲気醸し出している。下線部の「屍体の解剖学的地図が現れている」に示されているように、この分析自体が「人体実験」や「生体解剖」を意識して描かれている。また、分析が中央保険病院の医者である山本博士の指導下で行われていることも、この死体分析が現実の「人体実験」と「生体解剖」を想起させる。

周知のように、「人体実験」と「生体解剖」が否定的に評価されるようになったのは、ナチスドイツによる「人体実験」と「生体解剖」が世に知られたからである。次節で改めて詳しく論じるが、本作には、母親を強制的に中絶させ、胎盤を取り出して「水棲人間」に改造するというプロットが描かれている。テキストにあるこの中絶に関する描写は、ナチスドイツが実施したユダヤ人女性の不妊実験などのような「生殖実験」を指し示している可能性を孕んでいる。ただし、安部公房の場合、「人体実験」と「生体解剖」が描かれた際、そこにはナチスドイツが行ったものとは別のモデルがあったのではないかと思われる。本作品において、「人体実験」と「生体解剖」が示唆的に描かれていた原因の一つに、安部が満洲で経歴した「人体実験」などの影響があったからではないかと考えられるからだ。終戦間際の満洲での生活状況を安部は次のように記述している。

満洲は、意外に平穏だったし、いっこうに戦争が終わる気配もない。[...] 当時父は開業していたので、その手伝いをしたりした。[...] その冬、発疹チブスの大流行があり、診療にまわった父は、感染して死亡。¹²

引用にあるように、安部は東京帝国大学で医学を専門とする前に、既に医者である父・安部浅吉の仕事を手伝うことを通して、病気に罹った人体、もしくは死体に触れた可能性があった¹³。留意しなければならないのは、安部浅吉が当時勤務していた満洲医科大学では、「生体解剖」といった医学実験が行われていたことである。帝国政府が戦争中に実施した医学実験を研究してきた末永恵子は満洲医科大学で行われた実験について、次のようにまとめている。

以上のことから、満洲医科大学の研究の特徴は、まず当時の国策であった満蒙開拓に関連する保険衛生の研究を精力的に進め、満洲国の医療行政にも多くの教官が参加していたこと、第二に中国東北部に特有の地方病の研究に力を入れていたこと、第三に解剖教室において学会の風潮を背景に人類学的比較研究が行われ、特に中国人を対象としていたことが挙げられる。解剖学教室の業績中

¹¹ 同上、pp.42-43。

¹² 谷真介『安部公房評伝年譜』新泉社、2002年7月、pp.17-18。

¹³ 木村陽子は安部が満洲で死者と接触している可能性について、「実際の安部公房は、敗戦前後から日本に引揚げるまでの多くの時を医師、またはそれに準じた立場で過ごし、想像を絶する数の人間の死に関与していたのである」(「死者との同化からマルクスの幽霊へ」『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013年12月、pp.70-71)と述べている。

には、人道上許されない研究があった。おそらく日本国内では不可能で、日本の支配下にあった「満州国」においては可能な生体解剖による脳研究である。¹⁴

末永氏の調査にあるように、満洲医科大学で行われてきた「脳研究」は、中国人を実験対象とした「生体解剖」によって成し遂げられている。本来、こうした「生体解剖」は極秘に進行させるために、医科大学外部の人間が知ることはほぼ不可能である。しかし、安部浅吉が「助教授の資格で母校に栄養学教室を持っていた」¹⁵ことから、この医科大学の秘密を知らないとは考え難い。また、安部浅吉のような内部の関係者のみならず、ここでの「生体解剖」は当時の非関係者にも漏れていたのである¹⁶。「生体解剖」が外部の人間にも知られていることを考慮すれば、医科大学の助教授を父としている安部公房が、この満洲医科大学で行われてきた「脳」に関する「生体解剖」を知っていたとしても不思議なことではないだろう。

注目すべきは、『第四間氷期』で描かれている「脳波の分析」とは、「男」の死後間もなく、「神経だけは死んでからも、三日ぐらいは生かしておける」¹⁷という状態下で行われた実験である。興味深いことに、作品に描かれている実験対象の状態は、偶然にも満洲医科大学で行われた「脳研究」の「生体解剖」における実験対象の状態と共通している。

生体解剖は、脳の組織学研究のために行われたと推測されるが、その時制作されたと見られる脳の切片のプレパラートが中国医科大学答案館に現存している。[...] そのプレパラートを自ら顕微鏡で観察した生理学者刈田啓史郎は、死後きわめて短時間のうちにホルマリン固定された脳切片であることを確認している。¹⁸

ここで言われているように、満洲医科大学の「脳研究」では、実験対象が「死後きわめて短時間のうちに」、その脳を解剖して切片のプレパラートを作っていたのである。この研究で使われている実験対象の状態は、上記の『第四間氷期』に登場する「男」の「脳波の分析」において、頼木が語っている死後三日以内という実験対象の状態と似ている。つまり、実験対象が死後ただちに解剖される点において、作品と現実は一致しているのだ。

また、安部公房自身は解剖が苦手だった上に、そのような授業にもほぼ出席していない点から推測すれば、ここで描かれている「生体解剖」とは、おそらく彼自身の医学経験を下敷きにはしていないと思われる¹⁹。にもかかわらず、『第四間氷期』に描かれている「男」の「脳波の分析」が、かつて満洲医科大学で行われた脳の研究と酷似していることは、「予言機械」の予言過程が示唆する「人体実験」や「生体解剖」には、安部の満洲での記憶、とりわけ、満洲医科大学で行われた「生体解剖」と関わる記憶が下敷きの一つとなっている、ということが言えるのではないだろうか。

¹⁴ 末永恵子「旧満洲医科大学の歴史—医学研究・医療活動・教育—」『戦争・731と大学・医科大学』文理閣、2016年8月、p.219。

¹⁵ 安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011年3月、p.29。

¹⁶ 前掲、末永恵子(2016年)、p.216。

¹⁷ 前掲、安部公房(1998年)、p.38。

¹⁸ 末永恵子「15年戦争期の大学における医学研究——旧満洲医科大学を事例として」『日本の科学』第43号、2008年2月、p.19。

¹⁹ 前掲、安部ねり(2011年)、p.47。

『第四間氷期』では、「予言機械」の他に、「水棲人間」という現実世界では存在しない生物が描かれている。次節では、この「水棲人間」の意味合いと作者の満洲での経歴との関連性を考察したい。

3. 「水棲人間」と「満洲」

『第四間氷期』には「水棲人間」という非常に印象深い生物が描かれている。「水棲人間」は、哺乳類の人間が鰓を持って、水の中で生きるという現実には考えられない奇妙な生物である。「予言機械」によれば、未来では海面が上昇することによって、陸が消滅してしまうことになる。しかし、水棲哺乳類は、外部の環境の変化に適応するために自発的に進化した生物ではなく、予言を見た人間が、こうした環境に適応するために、人間の胚胎を科学的に改造したことによって生まれた生物である。つまり、「水棲人間」とは、人間が進化論的に進化した生物ではなく、人間によって作り出された「人造生物」と言えるだろう²⁰。ただし、この「水棲人間」は、二代目から繁殖できるようになったため、一代目の「水棲人間」のみが「人造生物」であることも指摘しなければならない。

この「水棲人間」は安部の想像によって作られた空想の生物である。しかし、「水棲人間」という生物の発想は本作以前から既に構想されている。例えば、1955年4月に出版された『盲腸』には、羊の腸を人間に移植することによって、糞を消化できるようになる「草食人間」が描かれている。ここでの「草食人間」は、食糧危機を克服するために、人間の手によって技術的に改造された新しい生物である。『第四間氷期』に描かれている、大陸の沈没に対応するために人間の胚胎を科学的に改造したことによって生まれた「水棲人間」は、その創造の目的と過程において、『盲腸』の「草食人間」と相似している。また、1953年3月に刊行された『R62号の発明』には、ロボットに改造された人間である「人造人間」が描かれ、この「人造人間」も、人間が人間の肉体を改造する点において、「草食人間」や「水棲人間」と共通している。こうした人間の科学技術によって人間そのものを改造して新しい生物を創造する発想は、58年7月に連載し始めた『第四間氷期』から5年前に既に構想されていたのである²¹。

「水棲人間」について、これまでの研究では、その象徴性が当時の社会状況を如何に反映しているか、という点から論じられてきた。例えば、鳥羽耕史は「水棲人間」の特徴に視点を置き、「水棲人間」が日本人の顔をして、日本語の文法を使っていることで、彼らが日本人を象徴し、作品が日本の革命を描いていると述べている²²。また、柚谷英紀は「水棲人間」の出産に焦点をあて、「水棲人間」のイメージは、日本の50年代から60年代にかけて、墮胎が多発している社会状況を示唆している、と指摘している²³。

こうした先行論を踏まえて、筆者はこの「水棲人間」に含まれている他の現実的な意味合いを考察したい。まず、「水棲人間」を作っている山本氏の話を下に引用する。

²⁰ 鳥羽耕史は、「水棲人間」が作れる基礎となっているのは、遺伝子ではなく、ソ連の生物学者ルイセンコが提唱した唯物論的弁証法をそのまま生物学に応用したミチューリン生物学であると論じている(「安部公房『第四間氷期』——水の中の革命」『国文学研究』第123号、1997年10月、p.107)。

²¹ 1952年6月に刊行された『水中都市』には、人間が魚に変形して水中で活動するプロットが描かれているが、魚への変形には技術的加工が施されておらず、また、人間は能動的に、自発的に魚に変形したために、「草食人間」や「水棲人間」とは発想が異なる。

²² 前掲、鳥羽耕史(1997年)、p.114-115。

²³ 柚谷英紀「安部公房『第四間氷期』論：SF・仮説・グロテスク」『日本文藝研究』第66巻第1号、2014年10月、p.142。

私たちの目標は、大きく言えば、生物の計画的改造ということでした。[...] 進化を人為的に、かつ飛躍的に、しかも定向的に行わせようという大それた計画ですな。[...] その発生的段階において、なんらかの手を加えてやれば、その生物を系統発生から引離し、まったく新しい種にしてやることもできるわけだ。²⁴

山本氏の話によれば、研究所で行われている「計画的改造」とは、生物に対して「人為的」、「飛躍的」、「定向的」に「手を加え」ることによって「進化」させ、「新しい種」を作り出すことである。「予言機械」によれば、未来では大陸はすべて沈没するため、陸棲生物は全て水中での生活に適応できなければならぬのである。従って、山本氏が述べている「新しい種」とは、陸棲生物から改造された水棲生物である。この陸棲生物を水棲生物に変える過程は、生物が自発的、能動的に外部の環境に適応するまでに、長い時間をかけて行われる進化ではない。その過程とは、人間の技術を強制的に施すことによって、短時間の中で、なおかつ、水中での生活に適応できることを唯一の目的とした進化である。この時点では、水棲生物における水棲できない方向に進化する可能性は全て排除されている。

また、このような「人為的」、「飛躍的」、「定向的」進化が、政府と財閥が主導している点を考慮すれば、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」の改造は、20世紀初頭から科学界や政界で多くの支持を得てきた優生学を想起させる。優生学(eugenics)とはイギリスの科学者フランシス・ゴールトンが作り出した造語で、「人類の遺伝的資質を高めたり減退させたりする社会的要因や、人類の遺伝的資質を向上させる社会的方法を研究する遺伝学の一分野」²⁵のことである。この優生学思想の影響で、世界各国では、「優れた」男女を結合させることで「有能」な子供を誕生させる一方で、女性の中絶を通して「優れていない」子供の出生を抑制することによって「劣る」人口を減らすといった運動が起こるようになる。しかし、ナチスドイツでは、優生学は民族政策と合体し、ホロコーストにまで至ったために、1930年代以降、優生学は次第に批判されるようになり、第二次世界大戦後にはほぼ言及されなくなった。しかし、1950年代から、遺伝学が更に発達し、民族や階層による偏見なしに人間の遺伝子を改善しようとする新しい優生学が生まれてきた²⁶。『第四間氷期』が創作された時期では、ちょうどこの優生学が再び流行した時期でもある。「水棲人間」の改造過程が優生学を想起させたのは、優生学が普遍的な知識として日本においても知られているという背景があったからではないだろうか。例えば、柚谷英紀は本作と優生学との関係について、次のように述べている。

貞子は、中絶の決定権を夫、医者へと譲渡して行き、最終的にそれは「政府にまさる権限をもっている」という海底開発協会という権力に回収されてしまったのである。勝見の子どもが水棲人間へと生まれ変わるまでに母親から父親へ、父親から医師へ、医師から国家へと責任が移転して行くバースコントロールの戯画とも言える構図が描かれているのである。²⁷

柚谷は、女性登場人物の中絶に焦点をあて、ここで描かれている女性の中絶は、戦後の優生保護法によってもたらされた1950年代後半に多発した「墮胎」という悪影響を示唆している、と指摘している。前述したように、優生学が否定的に評価されるようになったのはナチスドイツによる「人体実験」であっ

²⁴ 前掲、安部公房(1998年)、p.95。

²⁵ 『科学大辞典』第二版、丸善株式会社、2005年2月、p.1514。

²⁶ 『現代科学史大百科事典』朝倉書店、2014年5月、pp.789-790。

²⁷ 前掲、柚谷英紀(2014年)、p.145。

た。また、ナチスドイツの「人体実験」は主に「生殖実験」と「生体解剖」に分かれる²⁸。「生殖実験」では、「優秀」なアーリア人の子孫を増やして、「劣等」なユダヤ人を絶滅させるような実験、すなわち、ユダヤ人女性の大量不妊実験が行われていた。『第四間氷期』における女性登場人物の中絶は、日本の1950年代の「墮胎」状態を反映しているという柚谷の論考の他に、この優生学に基づくナチスの「生殖実験」をも指し示しているのではないだろうか。『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」の改造は、遺伝学をもとにして優生学を忠実には再現してはいないが、「水棲人間」が改造される理由や動機などからみて、作品に描かれている「水棲人間」に優生学の影響が隠されているということはある。

前節では、勝見と頼木が予言対象を「実験材料」と称し、また、予言そのものを「人体実験」や「生体解剖」と語っている背後には、安部の満洲での植民地体験が関与している可能性について考察した。ここで留意しなくてはならないのは、「人体実験」と「生体解剖」の知的基盤を構築した一つの要素が優生学だという点である。ここから、『第四間氷期』に描かれている「水棲人間」のイメージにも、安部の過去の記憶、即ち、満洲での植民地体験と関連している可能性が隠されていると推測できるのではないだろうか。例えば、未来の「水棲人間」の乳児について、テキストでは次のように描写されている。

カメラが仕切りの一つに接近する。合成樹脂の箱である。中に白っぽい皺だらけの水棲乳児が、大きな頭を下に、尻を浮せた奇妙な姿勢で、鰓をひくつかせながら眠っている。²⁹

引用に描かれている「水棲人間」の乳児は決して美しいものではなく、むしろある種グロテスクな生物と言える。とりわけ、「白っぽい皺だらけの」「大きな頭」と言った描写は「水棲人間」の乳児に対する読者の嫌悪感を殊更煽ぐものだと言っても過言ではない。留意すべきは、安部が満洲で生活した際、『第四間氷期』に登場する「水棲人間」の乳児と似通った幼児と出会っていた点である。周知のように、東京で生まれた安部は17歳まで満洲で過ごしてきた。満洲での植民地体験が彼に多大な影響を与えたことは言うまでもない。彼には以下のような満洲での回想がある。

生まれたばかりの赤ん坊の死体は、よくあちこちどころがっていた。[…] 鼻の先に腐敗してゴム風船のようにふくらんだ赤ん坊が静かにねむっているではないか。³⁰

安部の記述は、満洲の土地の風景を残酷に再現しているが、恐らく事実だと思われる。下線部の「腐敗してゴム風船のようにふくらんだ赤ん坊が静かにねむっている」という描写は、『第四間氷期』にある「白っぽい皺だらけの水棲乳児が、大きな頭を下に、尻を浮せた奇妙な姿勢で」「眠っている」ことを想起させるのではないだろうか。両者は共に幼児である上、その幼児には共にグロテスクなイメージが漂っている。

『第四間氷期』に描かれている科学的・未来的存在である「水棲人間」の幼児は、必ずしも安部が満洲で実際に見た幼児のイメージをモデルにしているとは断定できない。ただし、この「水棲人間」という設定の背後に、安部の過去の満洲での実体験が下敷きとなっている可能性も否定できない。例えば、「水棲人間」の生活空間としての海底に関して、テキストでは次のように描かれている。

²⁸ 小俣和一郎の『検証 人体実験 731部隊・ナチ医学』（第三文明社、2003年8月）を主に参照した。

²⁹ 前掲、安部公房(1998年)、p.146。

³⁰ 安部公房「瀋陽十七年」『旅』第28巻第2号、日本交通公社、1954年2月、p.23。

まあ、財界のお歴々にしてみれば、こうして人工植民地の開発でもしなければ、ちょっとこの頭打ちを乗り切るめどはつかないんじゃないんですか。[…] さっそくおえら方がとんで行って、水中植民地の未来を予言してもらっていたことでしょうか。[…] モスクワの予言機は、未来は共産主義だと予言したそうですが、まさか、海底の植民地までは考えていなかったでしょうからね。³¹

水棲哺乳類が作り出されることに疑問を持つ勝見博士に対して、山本氏は上記のように返答している。下線部に注目すると、山本氏は「人工植民地」、「水中植民地」、「海底の植民地」などの言葉で水棲哺乳類の世界を比喩的に語っている。つまり、水棲哺乳類の世界とは「植民地」なのだ。山本氏が語っている時点は、水棲哺乳類から「水棲人間」への過度期であるため、「水棲人間」が暮らす世界は果たして「植民地」と言えるかどうかは断言できないはずである。しかし、「予言機械」が呈示している未来の世界において、この「植民地」はより残酷な現実味を帯びている。例えば、陸が沈没してから、日本政府は次の内容をアナウンスしている。

政府はその後の国際関係を有利に導くために、極秘のうちに、水棲人間を製造し、海底植民地の開発をすすめてまいりました。現在すでに、三十万以上の水中人を有する海底都市が、八つもあります。

[…]

彼等は幸福であり、従順であり、このたびの災害に対しては、あらゆる協力をちかってくれました。間もなく皆さんのお手もとにも、救援物質がとどくはずですが、そのほとんどが、この海底から送られたものであります。³²

この引用に示されるように、「水棲人間」は陸生人間が災害を受けた際に援助する仕事を主にしている作業員である。下線の「従順」であることは、まさに「水棲人間」が陸生人間に抑圧されている証拠であり、「あらゆる協力をちかって」いるよりも、「政府」からこうした労働を強いられたと言ったほうが妥当だろう。山本氏によれば、「水棲人間」の主な労働は「海底工場を建設中ですし、海底鉱山や海底油田に働きに行く者もいるでしょう。また海底牧場も人手不足で困っているんですから」³³である。その内容からも重労働が大きな割合を占めているため、「水棲人間」が陸生人間に使われていることは確かである。つまり、水棲哺乳類から「水棲人間」まで、すべてが陸生人間の生活をよりよくするために開発された生物にしか過ぎないのである。もともと「水棲人間」の生活空間であるはずの海底は、陸生人間の植民地として開発され、また、「水棲人間」自身も陸生人間に抑圧され、支配統治されていたのだ。『第四間氷期』に登場する「水棲人間」と陸生人間は、おそらく被植民者と植民者をそれぞれ指し示し、「水棲人間」の境遇は、かつて帝国主義によって支配統治されていた植民地及びその土地で生活する人間の歴史を示唆していると思われる。

安部公房の場合、青少年期を日本の植民地である満洲で暮らしてきたために、「水棲人間」と陸生人間に示唆されている植民地と帝国は、それぞれ満洲と日本を具体的に指し示していると考えられる。例えば、海底に位置する陸生人間の住宅地が特別扱いされていることは注目に値する。

³¹ 前掲、安部公房(1998年)、p.109。

³² 同上、p.166。

³³ 同上、p.156。

政府の建物の裏手には、同じような型だが、それよりすこし小さめなビルが、さらに三つばかり並んでいた。これは一般住宅用で、屋上には専用のヘリコプターがあつたりして、なかなか便利に出来ている。それに、水棲人立入り禁止の、有刺鉄線でかこまれた広い庭には、谷間もあり、暗礁もあり、色とりどりの海藻の林もあり…… […] あるいは銃を手に、家族づれのピクニックでもしてみたくなる。³⁴

ここにあるように、陸生人間の住宅は「水棲人間立入り禁止の、有刺鉄線で」囲まれた場所であり、海底だけが「水棲人間」の世界であるにも関わらず、この住宅は「水棲人間」の生存空間を奪っている。また、「銃を手に」しているのは、おそらく、「水棲人間」から命を守るためだが、それは同時に陸生人間が「水棲人間」の命を脅かしていることを象徴している。こうした描写は、帝国とその植民地からなる一般的な抑圧関係との類似性を示していると言えるのではないだろうか。

木村陽子は満洲での詳細な現地調査を行い、安部公房が過ごした満洲での環境は極めて恵まれた生活環境であったことを確認している。木村の調査によれば、安部公房が生活していた奉天は〈都市型・中上流階層〉社会であり、その生活水準は群を抜いていた³⁵。満洲国において、日本人は他民族とは異なる存在であり、指導民族と位置づけられたために、制度的に特別な配慮が加えられていた。そうしたことによって、他民族の生存空間は奪われ、彼らの生活が深刻であったことは事実である³⁶。『第四間氷期』において、陸生人間の生存空間は、「水棲人間」の生存空間を占拠した上にその生活自体も「水棲人間」を抑圧することによって、高い水準を維持できたのである。テキストに描かれている陸生人間と「水棲人間」との抑圧的な関係は、そのまま満洲における植民者としての日本人と、被植民者としての他民族との関係を仄かしていると言えるのではないだろうか。また、「水棲人間」の幼児の教育場面では、次のように描かれている。

その下が各年別の普通教室……教課はわれわれの場合と同様、読み書き算数からはじめますが、その後を、どういうふうに持っていったらいいものか…… […] けっきょく私どもの臆測を出るものではない…… […] むろん、歴史だとか、地理だとか、社会科だとかいうものはありません。人間と、彼等との関係を、一体どんなふうに教えたらいいものやら、私らにはちょっと判断がつかかねるのです。³⁷

引用部に示されているように、「水棲人間」への教育は陸生人間によるものであり、その教育内容も、「私どもの臆測を出るものではない」に描かれているように、あらかじめ陸生人間が決めていたのだ。とりわけ、「歴史」や「地理」といった項目が設けられていないことは注目に値する。確かに「水棲人間」は陸生人間によって作られた生物であるために、「彼等」には歴史がないので、「歴史」を教える必要はないのかもしれない。前文でも言及しているように、陸生人間にとって、「水棲人間」とはあくまで重労働を提供するものとして作られたために、「彼等」に「歴史」や「地理」といった科目を教える必要はもと

³⁴ 同上、p.166。

³⁵ 木村陽子「安部公房の「奉天」体験——満洲教育専門学校附属小学校の英才教育を中心に」『東アジア研究』第53号、2010年3月、p.40。

³⁶ 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年3月、pp.75-76。

³⁷ 前掲、安部公房(1998年)、p.159。

からなかったのだ。陸生人間は表面上は「人間と、彼等との関係を、一体どんなふうに教えたらいいものやら」と悩みながら語っているが、実際には、陸生人間は「水棲人間」といった「彼等」を「人間」とは認めず、「水棲人間」と陸生人間を同一水準の「関係」で考えることがなかったのである。上記の引用は、植民地の原住民に対して、支配統治教育を強制的に行う帝国日本の植民地政策を想起させる。例えば、磯田一雄は帝国日本の植民地での教育政策について、次のようにまとめている。

実際、知識としての地理や歴史などは、およそ教育の対象とは考えられていなかったという歴然たる証拠がある。満州帝国の「国民学校規定」や「国民優級学校規定」を見ると、「学科目及其程度」では一応国史や地理を教えることになっているが、「学籍簿格式」の中では「国民科」で評価の対象となるのは「国民道徳」と言語(満語・日語または蒙古語)だけである。国史や地理の項目は見当たらないのである。つまり国史や地理の教材は「国民道徳」(建国精神)を培うための素材に過ぎず、その知識は評価の対象とはされていないのである。愚民政策と非難されるゆえんである。

このように、植民地においては民族的自覚を促すおそれのある歴史や地理は極力教えないでおこう、という権力側の姿勢がまず目立つ。³⁸

引用にあるように、被植民者の「民族的自覚を促すおそれ」があるために、満洲国で実施されている教育では、「地理」と「歴史」は含まれていなかった。『第四間氷期』における「水棲人間」の幼児に与えている教育方法は、植民者としての日本人が、被植民者である他民族の人間をコントロールするために行われた、帝国日本のこうした強制的な教育政策と酷似している。『第四間氷期』における「水棲人間」と陸生人間との関係が、植民地と帝国との抑圧的な関係を示唆している背後には、やはり安部公房の満洲での植民地体験の影響があったと言えるだろう。

4. 安部公房の満洲での「記憶」と作品における「記憶の未来化」

『第四間氷期』で提示されている「予言機械」の予言内容とは、未来の予言よりも、過去の記憶の再現が主となっていることは既に前文で論じた。「予言機械」の作動原理とは、過去に発生したことを可能な限り収集し、こうしたデータをもとに未来の可能性を予測するという計算方法である。前節で考察したように、「予言機械」は未来という現段階では不在であるものに焦点をあてているのではなく、既に過ぎ去っていた記憶といった過去のものを優先している。言い換えれば、「予言機械」は記憶を絶対的な事実として扱い、この疑う余地のない事実としての記憶によって決定づけられる未来を提示する装置である。そして「予言機械」の「予言」は、「記憶」に権力と支配力を付与すると同時に、その一方で、未知の未来が持つ本来の不確定性を全て排除したのだ³⁹。

安部が「記憶」自体を支配的・抑圧的な存在として示唆的に描いているのは、やはり彼の満洲での記憶と関係を帯びているのではないかと思われる。前節では、本作に登場する「水棲人間」と「海底植民地」の発想には、おそらく安部の満洲経験といった過去の植民地での記憶が関与している、という可能

³⁸ 磯田一雄「皇民化教育と植民地の国史教科書」『近代日本と植民地4 統合と支配の論理』岩波書店、2001年4月、pp.127-128。

³⁹ 中野和典は『第四間氷期』における記憶と権力との力関係について、「予測は誰かと結びつくことによって、初めて現実的な強制力を発揮するのである。[...] 予言=権力とは、予測技術の主導権を握る者によって情報が選別させるために、予測を忠実には反映背せず現れる強制力なのである。」(「予言=権力：安部公房『第四間氷期』論」『近代文学論集』第37号、2011年11月、pp.126-127)と述べている。

性について論じた。また、作中において示唆的に描かれている「人体実験」や「生体解剖」にも、安部の満洲での記憶が関連しているという可能性について述べてきた。しかし、そもそもこうした満洲での記憶に関して、安部自身は否定的に捉えていたのではないだろうか。

『第四間氷期』が執筆される一年前に、安部は自身の植民地経験をモデルに描いた『けものたちは故郷をめざす』(1957年1月)を刊行した。『けものたちは故郷をめざす』は満洲での実体験が投影されていると安部が唯一公言している作品である。小林治が「この作品以降、小説において安部が満洲を直接に登場させることはなくなる」⁴⁰と評しているように、本作以降、安部は小説作品において、満洲を直接描くことがほぼなかったのである。安部がなぜ満洲に言及しなくなったかは定かではないが、彼が満洲での実体験を否定的に捉えるようになったことが原因の一つではないかと考えられる。例えば、『けものたちは故郷をめざす』執筆前のエッセイで、安部は次のように述べている。

瀋陽を出身地だと割切ってしまう理由であるが、簡単に言うと、われわれ日本人はそこで植民地の支配民族として暮らしていたのだということである。私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。[...] 植民地を故郷だということは絶対できないことである。⁴¹

引用にあるように、安部が瀋陽を自身の出身地だと認識しようとしなないのは、植民地都市・瀋陽を故郷と認識する行為は、日本人が「植民地の支配民族として暮らしていた」ことに繋がるからである。おそらく植民地での支配統治への嫌悪から、安部は「植民地を故郷だということは絶対できな」かったのである。故郷に関する安部の記述から、彼は自身の植民地体験が、植民者によるものであるために、その経歴を否定的に捉えていることがうかがえる。『けものたちは故郷をめざす』が刊行された際に、『第四間氷期』が構想されているのならば、作品に登場する「予言機械」と「水棲人間」といった科学的存在から導かれる安部の満洲での記憶も、同じく植民者という抑圧者による記憶であるために、安部がこのような記憶を否定的なものとして描くようになったのではないだろうか。

安部が自身の満洲での記憶を否定的に捉えていることは、テキストから示唆されている「記憶の未来化」という概念からも説明できる。例えば、勝見博士の現在は、殺害された「男」の記憶にとって未来である。同時に、「博物館の陸生人をみていれば、そんな気持ちもしないではない。だが、そう思うだけで、それが実際どんなものであったかは、想像してみることもできないのだ」⁴²に記されているように、勝見博士の現在は、未来の「水棲人間」の世界から見れば過去の記憶となっているのだ。つまり、『第四間氷期』においては、過去の記憶がそのまま未来化し、「記憶の未来化」という概念が示唆されていると言える。

「記憶の未来化」とは、原爆被害者の証言について研究しているヨネヤマ・リサが「記憶の弁証法——広島」⁴³という論文で使用した言葉である。この論文において、ヨネヤマは次のように述べている。

⁴⁰ 小林治「安部公房『けものたちは故郷をめざす』について：満洲体験の対象化をめぐる」『駒沢短大文』第25号、1995年3月、p.54。

⁴¹ 前掲、安部公房(1954年)、p.22。

⁴² 前掲、安部公房(1998年)、p.170。

⁴³ ヨネヤマ・リサ「記憶の弁証法——広島」『思想』第866号、1996年8月。

松田(原爆被害者、筆者)の態度からわかることは、人々を証言活動にむかわせる強力な衝動が、ひとつには、反史実的歴史(counter-factual history)の想像力を、もうひとつには、語り手が目撃した事件が将来ふたたび起こりうるかもしれないという警告を、聞き手に伝えたいという抑えがたい欲求に由来しているということである。前者のばあい、松田の語りは実際にあった過去を証言することによって、ありえたかも知れない「別の過去」もしくは「仮定法の歴史」を想像させている。いっぽう、後者の同じ体験を人にくりかえさせたくないから語る、という態度は逆に、松田の証言を現在さらには未来へと向かわせている。そこにはネバー・アゲイン、つまり起こりうると予測される事態をあらかじめ牽制する、「記憶の未来化」とでもいうべき時間軸上の介入が起きているのである。⁴⁴

上記の下線部に示されているように、ヨネヤマが述べている「記憶の未来化」という言葉には、戦争や原爆といった過去の悲惨な出来事が二度と繰り返されないようにという証言者の考えが隠されている。

これまでの推論から、『第四間氷期』にも、このような「記憶の未来化」といった過去の悲惨な出来事を未来に反復させないようにする、という思想が設定されているという仮説が成立するならば、その悲惨な出来事とは、おそらく帝国主義的拡張によって作られた植民地・満洲での安部の記憶ではないだろうか。この記憶が帝国主義によって作られた抑圧者の記憶であったがために、安部は満洲での自身の記憶を否定的に捉えていたと思われる。

おわりに

本稿では、安部公房の長編小説『第四間氷期』を対象に、テキストに登場する「予言機械」と「水棲人間」といった科学的・未来的存在と、安部の過去の「記憶」との関連性を考察し、とりわけ、安部公房の満洲での植民地体験と関連している可能性について論じた。

1958年7月から連載されるようになった『第四間氷期』は日本最初の本格的SF小説と呼ばれている。本作に描かれている「水棲人間」や「予言機械」などの設定は、重要な意義を持つ。『第四間氷期』に登場する日本の「予言機械」は、実際には未来を予言することよりも、過去の記憶を再現するところに力を入れている。そのため、この「予言機械」が反復する記憶の一つは、おそらく安部公房の過去の満洲での植民地体験だと思われる。そして、作品に描かれている「水棲人間」の背後には、おそらく優生学が知的基盤として存在し、この「水棲人間」の改造は、「生体解剖」のイメージを想起させる。また、作品に描かれている「生体解剖」の過程が、満洲医科大学で行われた現実の「生体解剖」と酷似していることから、『第四間氷期』に登場する「水棲人間」は、安部の満洲での植民地体験を下敷きにして作られた可能性を孕んでいる。ただし、『第四間氷期』を執筆する前後において、安部は自身の満洲での記憶について否定的に捉えるようになってしまっていたために、このテキストから反映されている植民地の表象が、否定的な意味合いを帯びている点を看過してはならないのだ。

本論文は、『第四間氷期』のテキストに描かれている「予言機械」と「水棲人間」の意味合いを分析することによって、この時期の安部の作品には、彼の満洲での負の記憶を下敷きにして、という可能性を提示したものである。

⁴⁴ 同上、p.23。

解放(かいほう、XIE FANG)
東京外国語大学大学院博士後期課程

[付記] 本稿は2018年12月9日に Hong Kong Polytechnic University で行われた The 12th International Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies で発表した報告“The Cold War and Memory in Abe Kōbō’s Works”を加筆修正したものである。

参考文献

- 上野俊哉『思想の不良たち 1950年代 もう一つの精神史』岩波書店、2013年
クリストファー・ボルトン「科学とフィクション、そしてポストモダン—安部公房『第四間氷期』論—」
『昭和文学研究』第34号、1997年
植民地文化学会『〈日中共同研究〉「満洲国」とは何だったのか』小学館、2008年
武田徹『偽満州国論』河出書房新社、1995年
田中裕之『安部公房文学の研究』和泉書院、2012年
田中隆一『満洲国と日本の帝国支配』有志舎、2007年
塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』吉川弘文館、2000年
土屋貴志「15年戦争期における日本の医学犯罪」『日本の科学』第43号、2008年
鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、2007年
永野宏志「安部公房『第四間氷期』覚書—マンマシン・システムに関する三つの「論理」的態度—」『工
学院大学研究論叢』第55巻第1号、2017年
山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中央公論社、1993年